

資料

幼児期の自己主張と誤信念の理解との関係

吉村 齊*

要約：本研究は、幼児期の自己主張と誤信念の理解との関係、およびその関係の発達差や性差を検討したものである。調査参加者は31名の4歳児と30名の5歳児からなる合計61名の幼稚園児であった。本研究は個別面接法で実施され、以下の結果が得られた。4歳児において、自己主張得点が低い子どもは、自己主張得点が高い子どもに比べると、他児の誤信念を正しく理解していた。他方、5歳児の自己主張による誤信念の理解の違いは認められなかった。以上のことから、4歳児における自己主張の発達は、例えば自己抑制のような他の要因とも関係しており、幼児期における誤信念の理解に影響を及ぼす要因であることが示唆された。

キーワード：自己主張、誤信念、幼児期

問題

これまで、人の行動や判断を促進する要因の1つとして人間関係が挙げられることは多くの研究で指摘されてきた。とりわけ、青年期では仲間からの受容と拒否が精神的な健康を規定する予測因になるという (Parker & Asher, 1987)。また、Bagwell, Schmidt, Newcomb & Bukowski (2011)によると、前青年期までに親密な友人をもたないことが成人期の抑うつ症状や自己コンピテンスの低さと関連していた。さらに、吉村 (2004, 2007)によれば、学校適応においても青年期では自己主張のあり方に規定されることが示唆されている。それゆえ、はじめて本格的な集団生活を送り仲間関係を形成する幼児期は、将来の社会適応において重要な時期といえる。同時に、その過程で習得する社会的スキルが適応感を規定することにもなる (Parker Rubin, Price & DeRosier, 1995)。そこで、本研究では幼児期の発達から人間発達の長期

的な展望に基づいて支援のあり方を計画する糸口を得るため、幼児期の社会的スキルとして自己主張を取り上げ、そのあり方に応じた他児とのかかわり方についての発達を検討する。

まず、幼児期の自己主張の発達について検討する。就学前の自己主張が仲間関係を形成する機会をつくり、将来の知的な面での成績に影響することは、多くの伝統的な研究で示唆されてきた (Kagan & Moss, 1962; Kohn & Rosman, 1972; Dorman, 1973)。また Barrett & Yarrow (1977)によると、自己主張を多く行う幼児は仲間遊びの場面で向社会的行動を多く行うという。これらの研究からも、自己主張が集団適応と深く関連していることを前提にしても支障はないと判断した。

ただし、柏木 (1988) が指摘するように、自己主張だけでなく自己抑制との均衡状態も重要な要因となる。なぜならば、たとえ積極的であっても攻撃的な自己主張であれば、他児から拒否される

*高知学園短期大学 幼児保育学科 Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

ことがあるからである (Coie & Dodge, 1998)。伊藤・丸山 (山本)・山崎 (1999) によると、自己主張の研究結果については先行研究と一致する傾向にあるが、自己抑制は必ずしも一致していなかった。それゆえ、幼児の自己抑制に対する認知の複雑さが推察される。これに関連して、平川 (2014) は年中児になると怒りなどの規範にしばられて自己主張の表出が抑制され始め、年長児以降になるとバランスを取りながら情動表出が可能になることを考察している。つまり、一般に自己主張が仲間関係形成に寄与する中、年中児から年長児にかけては自己抑制の質が大きく転換する時期であり、個人差も大きいことが示唆される。例えば、年長児では積極的に自己主張している子どもほど他児の意図や場面の状況などを正しく理解しているが、年中児の場合は仲間の意図などを理解できていても、規範にしばられて積極的に自己主張することが難しい子どもがいることも予測される。

こうした背景より、自己抑制の関連が予想される。一方、自己主張とは発達の様相が異なり、両者のかかわる構図がたいへん複雑になっていることも示唆される。因果関係についても不明な点が多いことから、本研究では自己抑制は取り上げず、まずは社会的スキルの対象を自己主張に絞って検討し、本研究の結果を踏まえて今後自己抑制との関連をどのように検討していくのか、その方向性を考察するための試験的分析と位置づける。そのため、理論的根拠が十分とはいえない段階での検討になることから、本研究では仮説を設定せず、結果の予測に止めて検討を行う。また、研究にあたっては、可能な限り怒りなどに左右されない状況を配慮して自己抑制のかかわりを最小限に止めながら検討を進めることとする。

ところで、他児とのかかわり方の発達については、これまでも社会的行動や対人葛藤解決、意図の理解など、さまざまな視点から検討されてきた。例えば、幼児期にけんかが起こりやすい発達要因に自己主張の急速な発達と自己統制の緩やかな発達が挙げられ、またけんかの経験を通して欲

求不満耐性や自尊感情の発達につながるものが、従来の先行研究から明らかにされてきた (吉村, 2014)。すなわち、問題になりそうな場面で集団にもまれることが情動や社会的スキルの発達につながり、社会適応へつながっていくことが示唆される。

中でも、意図の理解について、Crick & Dodge (1994) は適応的に振る舞うためには相手の敵意の有無を正確に帰属することが重要であることを指摘している。とりわけ、行為者の意図が曖昧な場合、ネガティブな行為はポジティブな行為に比べて意図的に判断されやすい (Knobe & Burra, 2006)。それゆえ、他児の意図を誤解してトラブルに発展することも推察される。鈴木 (2014) も指摘するように、対人葛藤を含む文脈では意図理解が難しいからである。

では、幼児期における意図の理解にはどのような特徴が見られるのだろうか。人の意図は、行為につながる要因となり、その前に意図は信念と願望から形成される (Wellman, 1991)。とりわけ、意図に大きく影響する要因として信念に注目した研究が多くみられる。その中でも、Wimmer & Perner (1983) は、信念と現実との関係をとらえることができる指標として誤った信念の理解 (誤信念) を取り上げ、誤信念の理解は4歳から7歳にかけて正答率が上昇することを見出した。その後も検討が重ねられ、主に4歳から5歳頃にかけて正答できるようになる考えが定説とされていた。

Wellman (1991) や Wimmer & Perner (1983) の結果に基づくと、4～5歳頃の時期に自己主張のあり方が転換期を迎え、誤信念の理解も深まることが考えられる。幼児期の集団生活の中で体験する仲間関係にはリスク要因と保護要因の両方がある (Hartup, 1996)。そのため、幼児の場合、自己の行為の意図とそれがもたらす結果に大きなずれが生じることがあれば、それに対するショックを受けやすいことから、周囲の大人が丁寧言語化していくことが重要になる (鈴木, 2016)。つまり、この時期に子ども達が正しい意図理解を

発達させられるよう支援し環境構成を行うためには、自己主張と誤信念の理解との関係がどのように発達するかを把握することが求められるのである。この問題が解明されれば、幼児期の集団生活への適応に寄与する支援のあり方を考えるだけでなく、将来の社会適応を促進するための保幼小中連携、さらにはその先の機関との連携へつなげていく上で大きな意義があるといえる。そこで、本研究では、幼稚園の年中児と年長児を対象に、自己主張と誤信念の理解との関係が年児間でどのように異なるのかを検討する。

方法

調査対象者

調査に参加した幼児は、A県内私立幼稚園に在籍する5歳児クラス31名（男児18名、女児13名）、4歳児クラス30名（男児15名、女児15名）、合計61名であった。

手続

1 自己主張に関する質問

対象者の自己主張の内省を測定するため、伊藤・丸山（山本）・山崎（1999）が開発した自己主張・自己抑制認知評定の自己主張に関する尺度を参考に、幼稚園生活における仮想場面を設定し、以下の質問を作成した。なお、質問にあたっては、対象者の内省可能性を高めるため、まず「Xちゃん（面接をしている子の名前）は、誰と仲よく遊んでいるのかな？」と場面を示した図（Figure 1 参照）を提示しながら尋ね、回答された名前の子どもをYに入れて、(1) (2)の質問を行うこととした。また、質問や提示する図は対象者の性別に応じて同性での関わりとなるよう配慮して質問を行った。

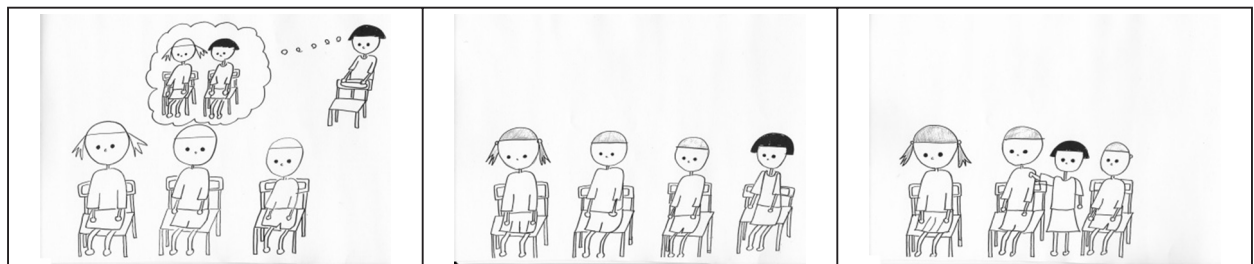


Figure 1 「座席に関する場面」の質問で使用した図（女児用）

(1) 座席に関する場面

まず、「Yちゃん（対象者と仲のいい友達の名前）と一緒に座りたいけれども、その隣に他のお友だちが座っています。こんな時、Xちゃん（面接をしている対象者）だったら、他の空いている席に座りますか？それとも、隣のお友だちに『Yちゃん（仲良しの友だち）と座りたいから席を代わって』といえますか？」と質問する。

得点化にあたっては、回答が「代わってと言う」意味であれば自己主張を行うことを示唆することから2点、「他の席に座る」意味であれば自己主張を抑えることを示唆することから1点とすることとした。

(2) グループ入りの場面

まず、「〇〇組のみんなでグループを作る時、一緒にグループになりたい子がいます。Yちゃんと一緒にになりたいかな？」と質問する（違うと回答したら、誰？と聞き、そこで挙げられた名前をYに当てはめる）。続いて、「こんな時、Xちゃんだったら、Yちゃんに『一緒にグループになろう。』といえず、近くのお友だちと一緒にグループになりますか？それとも、『一緒にグループになろう。』といってYちゃんと同じグループになろうとしますか？」と質問する。

ここでも、回答が「一緒にグループになろうと言える」意味であれば自己主張を行うことを示唆することから2点、「一緒にグループになろうといえず近くの友だちと一緒にグループになる」意味であれば自己主張を抑えることを示唆することから1点として得点化を行った。

2 誤信念の測定

対象者の誤信念の理解について測定するため、

Wimmer & Perner (1983) の課題を参考に質問を作成し、場面の様子を示した図 (Figure 2 参照) を提示しながら質問を行った。なお、対象となる子どもの名前については、対象者の理解によっては調査終了後の仲間関係に支障を来す可能性を残ることを配慮し、所属クラスにいない架空の名前を Z にあてはめて質問を行うこととした。

また、本研究では自己抑制の測定を取り上げないことから、怒りを感じることを排除し、適応的に振る舞うことがしやすい場面であることが求められる。つまり、敵意を強く感じる場面は避けなければならない。そこで、まずは試行的に作成された場面が「敵意を感じやすいか否か」を保育経験者 2 名 (経験歴 7 年、20 年) に尋ね、「感じやすいとは思わない」との見解が 2 名で一致した次の 2 つの場面を分析の対象とした。

(1) 積み木の場面

①場面の内容 積み木を取り上げた場面について、以下の内容を説明した。

Y ちゃんが積み木で遊んだあと、それを棚にしまって部屋を出ました。

Y ちゃんがいらない間に、Z ちゃんという子がやってきて、棚から積み木を出して遊びました。

Z ちゃんは積み木で遊んだあと、それを玩具箱にしまって出ていきました。

Y ちゃんがもう一度積み木で遊ぼうと思ってやってきました。

②誤信念の質問 説明後、「Y ちゃんは積み木がどこにあると思っていますか？」と質問し、回答が「棚」なら自己理解と区別して仮想場面の誤信念を正しく理解していることを示唆することから 2 点、逆に「玩具箱」なら誤信念を正しく理解していないことを示唆することから 1 点と得点化を行った。ただし、無回答や明らかに理解不足と思われる回答については、分析の対象から外した。

(2) コマの場面

①場面の内容 コマを取り上げた場面について、以下の内容を説明した。

Y ちゃんがコマで遊んだあと、それを白い箱にしまって部屋を出ました。

Y ちゃんがいらない間に、Z ちゃんがやってきて、白い箱からコマを出して遊びました。

Z ちゃんはコマで遊んだあと、それを黒い箱にしまって出ていきました。

Y ちゃんがもう一度コマで遊ぼうと思ってやってきました。

②誤信念の質問 説明後、「Y ちゃんはコマがどちらの箱にあると思っていますか？」と質問し、(1)と同様に回答が「白い箱」なら 2 点、「黒い箱」なら 1 点と得点化を行った。

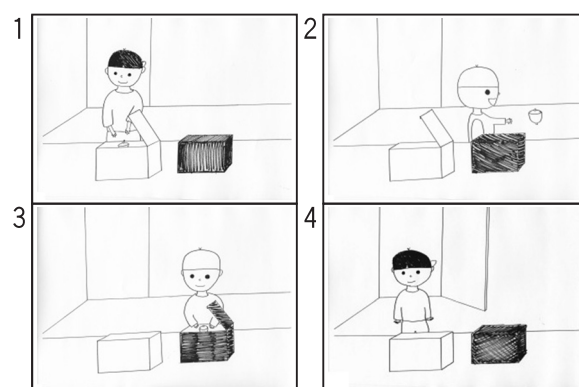


Figure 2 「コマの場面」で使用した図 (男児用)

調査の実施

2015年11月上旬から12月上旬にかけて、個別面接法による調査を実施した。調査は幼稚園のホールで行われた。また、調査の実施にあたっては幼児保育を専攻する短期大学 2 年生女子 3 名から図の作成や個別面接の協力を得た。この 3 名は、事前に筆者 (調査実施者) から研究の主旨や研究倫理の説明を受けた。その後、説明された概要について、3 名が筆者へ説明することによって、筆者が彼女達の理解度を確認した。また、3 名は、筆者の指導の下、事前に面接の進め方や記録方法などの練習を重ね、その技法を習得した。最終的に、筆者がその習得を確認し、調査へ参加することを承認した。

なお、本研究は、平成 27 年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会において研究目的と計画およびインフォームド・コンセントの手続きなどに関する審査を受け、その承認を得て実施された (承認番号第 31 号)。

結果

自己主張の群化

まず、各対象者の「自己主張」における2つの場面の平均値を尺度得点として、5歳児については5歳児の平均値 ($M=1.55$, $SD=0.35$) を基準に、平均値より高い群を「自己主張積極群 ($N=18$)」、低い群を「自己主張消極群 ($N=13$)」とした。また、4歳児については、4歳児の平均値 ($M=1.60$, $SD=0.40$) を基準に、平均値より高い群を「自己主張積極群 ($N=15$)」、低い群を「自己主張消極群 ($N=15$)」とした。

年児別の平均値を基準に分類した理由は、発達状況に応じてその集団で展開される自己主張が異なることが想定されることから、年児で平均値も異なることが予想されること、ただし本研究は自己主張の発達状況の分類が目的ではなく、自己主張の程度が誤信念の理解度とどのように関係し、その関係の年児による違いを検討することが目的であることを考慮したからである。

誤信念理解における自己主張、年児および性別との関係

幼児の自己主張の程度に応じて誤信念の理解がどのように異なるのかを検討するため、誤信念の理解尺度得点（項目あたりの平均値）を従属変数とした自己主張 (2) × 年児 (2) × 性別 (2) の三要因分散分析を行った。多重比較は有意水準を $\alpha = .05$ とした Tukey の HSD 法を用いた。性別を独立変数に取り上げた理由は、測定の際に男女で図を変えたことが結果を左右していないかを確認するためである。なお、分散分析による F 値を Table 1 に、各変数における平均値と標準偏差を Table 2 に示した。また、本研究の統計解析は SPSS Statistics 23を用いた。

分散分析の結果、年児の主効果が有意であった ($F(1, 53)=7.70$, $p < .01$)。多重比較の結果、5歳児 ($M=1.47$) が4歳児 ($M=1.23$) よりも誤信念の理解尺度得点が高かった。さらに、自己主張と年児との交互作用が有意であった ($F(1, 53)=5.45$, $p < .05$, $MSe = .12$, Figure 3)。年児別に自己主張の差について、単純主効果の検

定を行うと、4歳児では自己主張積極群 ($M=1.06$) に比べて自己主張消極群 ($M=1.36$) が有意に高かった ($F(1, 53)=5.35$)。一方、5歳児では自己主張による違いが認められなかった ($F(1, 53)=1.07$, $n.s.$)。

また、自己主張別に年児の差についても単純主効果の検定を行うと、自己主張積極群で5歳児が4歳児より有意に高かった ($F(1, 53)=10.23$)。一方、自己主張消極群では年児による違いが認められなかった ($F(1, 53)=.13$, $n.s.$)。

考察

本研究では、幼児を対象に、自己主張の積極性と誤信念の理解との関係が年長児と年中児で異なるか否かについて検討した。このことは、自己主張と誤信念の理解との交互作用を検討することで考察しうる。

本研究で特筆すべき事項は、自己主張と年児との交互作用が認められたことである。全般的に5歳児が4歳児に比べて誤信念を正しく理解している様相が認められた。それゆえ、誤信念の理解による年児の差が自己主張に応じて異なっていることを示唆するものといえる。特に4歳児において自己主張が積極的である内省した子どもの誤信念の理解尺度得点は低いことが認められた。自己主張消極群の年児間においても有意差は認められず、また5歳児では自己主張による差が認められなかった。すなわち、積極的に自己主張を行う4歳児のみの誤信念の理解が著しく低いこととなる。

Barrett & Yarrow (1977) などの先行研究より、一般に自己主張が積極的であれば誤信念の理解も高まることが推察された。その中で、4歳児にあたる年中児の場合、仲間や意図などを理解できていても、積極的に自己主張することが難しいことが予測されていた。したがって、本研究の結果は予測を支持するものであったと考えられる。

ただし、本研究では試験的分析であると位置づけられている。そのため、課題を整理して、今後の研究計画に反映させることが求められる。そこ

Table 1 三要因分散分析による F 値

従属変数	独立変数						
	自己主張A	年児B	性別C	A×B	A×C	B×C	A×B×C
(df)	(1, 53)	(1, 53)	(1, 53)	(1, 53)	(1, 53)	(1, 53)	(1, 53)
誤信念の理解	7.70**	.69	.19	5.45*	.80	.55	.58

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 2 自己主張と年児および性別における誤信念の理解の平均値と標準偏差

自己主張	4 歳児				5 歳児			
	積極群		消極群		積極群		消極群	
	男	女	男	女	男	女	男	女
N	5	8	10	7	4	5	14	8
誤信念の理解	1.00	1.13	1.30	1.43	1.50	1.60	1.50	1.31
標準偏差	.00	.23	.35	.35	.00	.42	.44	.37

上：平均値、下：標準偏差

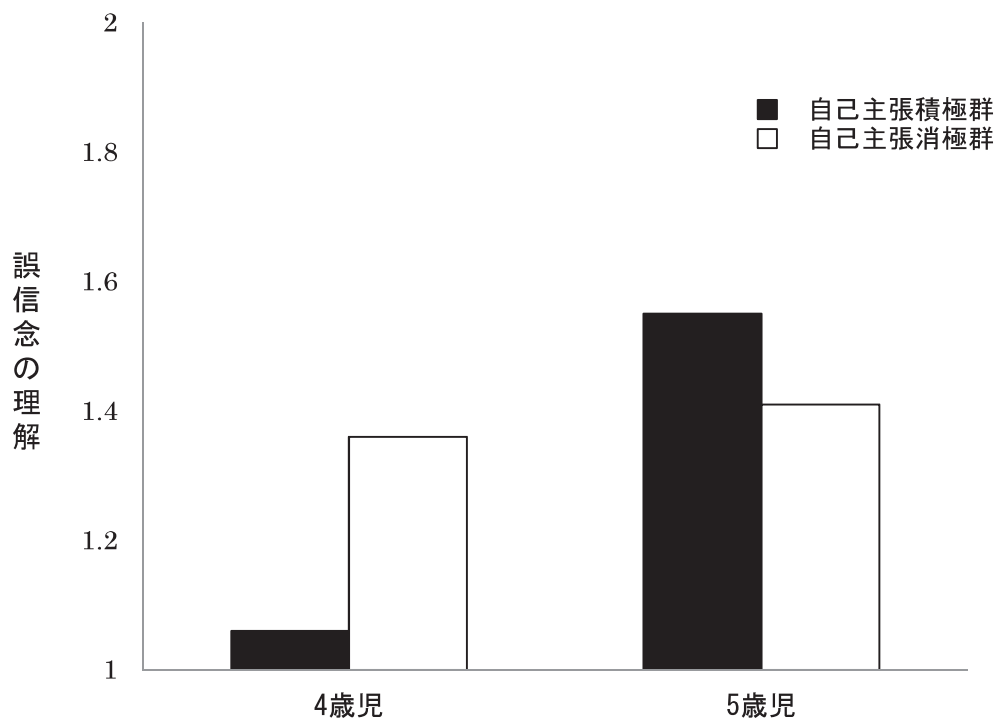


Figure 3 誤信念の理解における自己主張と年児の交互作用

で、以下では今後の課題を考察する。

まず、本研究では自己主張の主効果が認められなかった。つまり「自己主張が積極的であれば誤信念の理解も高まる」とする推察が必ずしも裏づけられなかったこととなる。とりわけ、4歳児の自己主張積極群のみの誤信念の理解尺度得点が著

しく低かった。それゆえ、他の要因による影響もその一因であることが考えられるとともに、その要因を追究する必要性を示唆するものと思われる。例えば、平川（2014）が指摘するように、4歳児では規範意識の高まりが自己主張を控えるようになり、5歳児では状況判断力の発達に伴って

適応的に自己主張することができるのであれば、個々の自己抑制や規範意識の発達が影響していることも予想される。今後、これらの要因との関連を含めた検討が課題として残されたといえる。

また、調査の時期や研究方法についても課題を考察しなければならない。本研究の調査は年度の後半に実施されたことから、自己主張と誤信念の理解との関係が著しい発達を遂げており、年児の違いに反映されなかったことが考えられる。いいかえれば、自己主張が積極的な4歳児ほど、他の要因による影響を一時的に強く受けやすいことも考えられる。その場合、幼児期の中に積極的に自己主張して仲間と相互理解したり葛藤したりする経験の過程において、誤信念を理解できる能力を獲得していくものの、同時に認知発達に伴って他の要因による影響を4歳の時期に受けやすいことが推察される。分散分析によって分類された変数の中には分散が見られないものもあり、調査対象者数を増やした上での検討も望まれる。今後、調査対象者数の適正を吟味し、本研究とは異なる時期に調査を実施したり、縦断的な検討をしたりする分析を総合して考察していくことが課題である。

他の要因について、本研究では当初から自己抑制の重要性に着目をしていたが、本研究実施にあたっては自己主張のみを対象とした。参考程度に、本研究を実施する前に予備分析を行ったところ、自己抑制による年児や個人間の違いがあまり見られなかったことから（未発表資料）、測定方法の改善が課題として残っている状況にあった。柏木（1988）も指摘するように、幼児期は自己主張の発達が著しいのに対し、自己抑制は緩やかに発達していく。そのため、幼児期には量的研究で自己抑制を測定する際、緩やかな発達の違いを見極める工夫の余地が残されていることが考えられる。

自己主張の質についても、もし自己主張の積極性が自己抑制を踏まえたものでなければ、攻撃的な傾向の強い積極性であることも予想される。逆に、自己抑制を踏まえた積極的な自己主張であれば、相互理解を目指した自己主張を心がけている

ことも推察される。本研究では、4歳児と5歳児の間に自己主張と誤信念との関係の違いが見出された。その原因については十分な解明に至っていない。原因の1つとして自己抑制の発達が関係していることも追究することに焦点をあてた検討が今後の課題として挙げられる。本研究では、その解明が幼児の認知発達を具体的に検討していく上で重要になることが確認された点で意義があると思われる。

柏木（1988）の研究が公表されて以降、わが国でも自己抑制の研究は方法上の工夫を含めて多くの成果が蓄積されてきた（首藤，1995；伊藤・丸山（山本）・山崎，1999）。研究方法についても、量的研究だけでなく質的研究や観察による分析も含め、本研究の主旨に適した研究方法を整理して活用することによって、自己抑制との関連を含めた追究を多角的に行うことが課題である。

このように、試験的分析と位置づけられた本研究では新たな問題が示唆され、特に自己抑制との関連性を追究する必要性が確認された。それでも、自己主張と誤信念の理解との関係が、年中児の頃に質的变化をもたらす可能性が示唆されたことは、幼児の心的葛藤を保育者が把握し、就学以降の発達を見据えたかかわりと支援を検討する上で貢献が期待できると考えられる。

付 記

本研究にご協力くださいました幼稚園の園児と保護者の皆様、先生方には改めて深く謝意を表します。また、本研究は、調査実施当時、高知学園短期大学幼児保育学科2年に在籍していた中澤彩妃さん、濱口晃穂さん、山崎有季さんのご協力を得て準備・実施されました。深く謝意を表します。

引用文献

Bagwell, C. L. (2004). Friendships, peer networks, and antisocial behavior. In J. B. Kupersmidt, & Dodge, K. A. (Eds.), *Children's peer relations: From development to intervention*. Washington DC: American Psychological Association,

- Pp.37-57. (バグウェル, C. L., 畠山美穂 訳 (2013). 友人関係, 仲間ネットワーク, 反社会的行動 クーパーシュミット, J. B.・ダッジ, K. A., 中澤 潤監訳 子どもの仲間関係: 発達から援助へ 京都: 北大路書房 Pp.36-54.)
- Bagwell, C. L., Schmidt, M. E., & Newcomb, A. F., & Bukowski, W. M. (2001). Friendship and peer rejection as predictors of adult adjustment. In D. W. Nangle & C. A. Erdley (Eds.), *New directions for child and adolescent development: Vol. 91. The role of friendship in psychological adjustment*. San Francisco: Jossey-Bass, Pp.25-49.
- Barrett, D. E., & Yarrow, M. R. (1997). Prosocial behavior, social inferential ability, and assertiveness in children. *Child Development*, **48**, 475-481.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. (1998). Aggressive and antisocial behavior. In W. Damon (Series Ed.) & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology, Vol 3. Social, emotional, and personality development*. New York: Wiley, Pp.779-862.
- Crick, N., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-110.
- Dorman, L. (1973). Assertive behavior and cognitive performance in preschool children. *Journal of Genetic Psychology*, **123**, 122-162.
- Hartup, W. W. (1996). The company they keep: Friendships and their development significance. *Child Development*, **67**, 1-13.
- 平川久美子 (2014). 幼児期から児童期にかけての情動の主張的表出の発達: 怒りの表情表出の検討 *発達心理学研究*, **25**, 12-22.
- 伊藤順子・丸山 (山本) 愛子・山崎 晃 (1999). 幼児の自己制御認知タイプと向社会的行動との関連 *教育心理学研究*, **47**, 160-169.
- Kagan, J., & Moss, H. A. (1962). *Birth to maturity: A study in psychological development*. New York: Wiley, Pp.49-84.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達: 行動の自己制御機能を中心に 東京: 東京大学出版会 Pp.155-178.
- Knobe, J., & Burra, A. (2006). The folk concept of intention and intentional action: A cross-cultural study. *Journal of Cognition and Culture*, **6**, 113-132.
- Kohn, M., Rosman, B. A. (1972). Relationship of pre-school social-emotional functioning to later intellectual achievement. *Developmental Psychology*, **11**, 445-452.
- Parker, J. G., & Asher, S. (1987). Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, **102**, 357-389.
- Parker, J. G., Rubin, K. H., Price, J. M., & DeRosier, M. E. (1995). Peer relationships, child development, and adjustment. In D. Cicchetti., & D. J. Cohen (Eds.), *Developmental psychopathology: Vol. 2. Risk, disorder, and adaptation*. New York: Wiley, Pp.96-161.
- 鈴木亜由美 (2014). 幼児の道徳的文脈における誤信念の理解 *発達心理学研究*, **25**, 379-386.
- 鈴木亜由美 (2016). 対人葛藤解決と心の理論 子安増生・郷式 徹編 *心の理論: 第2世代の研究へ* 東京: 新曜社 Pp.119-131.
- 首藤敏元 (1995). 幼児の向社会的行動と自己主張—自己抑制 *筑波大学発達臨床心理学研究*, **7**, 77-86.
- Wellman, H. M. (1991). *The child's theory of mind*. Cambridge, MIT Press, Pp.93-121.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.
- 吉村 斉 (2004). 女子学生の専門職就職意欲お

- よび学生生活への満足を規定する要因：自己表現と小集団閉鎖性に注目して 青年心理学研究, **16**, 1-14.
- 吉村 斉 (2007). 中学生の適応感を規定する要因としての対人行動とその性差 心理学研究, **78**, 290-296.
- 吉村 斉 (2014). 社会性 (コミュニケーション／愛着) と発達 谷川裕稔・富田喜代子・上岡義典編 教育・保育実習ガイドブック：振り返りができるポートフォリオつき 東京：明治図書 Pp.40-41.

Data

The Relationships between Children's Self-assertion and Their Understanding of Wrong Beliefs in Early Childhood

Hitoshi YOSHIMURA*

Abstract: The present study examines whether children's self-assertion affects their understanding of wrong beliefs in early childhood, and whether the relationships are influenced by their grade and sex. Participants were 61 kindergarteners (30 4-year old and 31 5-year old children). The researches were conducted by methods of interview, and the following significant results were obtained: 4-year old children whose self-assertion scores were lower understood other children's wrong beliefs more correctly than children whose self-assertion scores were higher. On the other hand, 5-year old children's wrong beliefs scores were not significantly different according to their self-assertion. Consequently, it seems reasonable to conclude that the development of 4-year old children's self-assertion also has a connection with other factors, for example self-control, and has a great influence on their understanding of wrong beliefs in early childhood.

Key words: Self-assertion, Wrong belief, Early childhood

*Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp